
バトルシップスよもやま話

桃山忠海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトルシップスよもやま話

【Nコード】

N7324Y

【作者名】

桃山忠海

【あらすじ】

本編はこちら↓<http://ncode.syosetu.com/n2934r/>

ここに掲載される文章は本編である「大日本リーグ - 大連戦記 -」の続編であり番外編であり設定資料集であります。主役チームである大連バトルシップスや所属選手について、多角的な記述によって世界観をより明確に提示していきたいと思っております。内容はあつてないようなもので気軽にどうぞ。

大連オフニユース11月（適宜更新）

11月15日 ノーリー引退会見 「肉体の限界」

15日、大連市内でクラウド・ノーリー外野手（36）の引退会見が行われた。引退理由に関して、ノーリー外野手は「プロとして必要なパフォーマンスを見せるために努力してきたが、肉体がついていかなかった。今季2度目の怪我で気持ちが切れたと言うか、もう限界だと感じた」と語った。また「9月には球団に（引退の意向を）伝えていたが、選手たちには余計な事に気をわずらわせたくなかったので言わなかった」と、チームを第一に考える姿勢は最後まで変わらなかった。

ノーリー外野手は27歳で大連に入団。バントなどの小技も巧みにこなすバツティングと高い守備力でチームを支えてきた。今季は怪我の影響もあり46試合出場で打率・241と低迷したが、内外野をそつなくこなすユーティリティー性と厚い人望でチームの東洋一に貢献した。その温厚な性格と徹底したプロ意識は知られており、柳中平、星渡など彼を慕う選手は多い。

同時に、来季からは二軍の守備コーチに就任すると発表され「来季からは新たな役割となるが、選手たちには自分が野球で得たものを全てを伝えていきたい。技術もそうだが、心構えと言った部分もね」と抱負を語った。この会見の後、現在沖縄で行われている大連の秋季キャンプに合流するために空港へ向かった。

11月16日 原、剣持らに戦力外通告

大連は16日、原克馬投手（31）、剣持純平外野手（30）ら8選手に戦力外を通告したと発表した。原投手は先発もリリーフも器用にこなす右腕。通算163試合に登板して9勝11敗防御率4.21だが、今季は3試合で防御率16.88と結果を残せなかった。原投手は「この成績では仕方がない。でも秋頃から体が動くようになってきた。拾ってくれる球団があればそこで頑張るだけです」と24日のトライアウト受験に前向きな姿勢を見せた。戦力外通告された8選手は以下の通り。

原克馬投手（31）
小林孝司投手（25）
李衛孝投手（28）
岡田正見投手（27）
鈴木常惟捕手（29）
王長映内野手（24）
陳久利内野手（23）
剣持純平外野手（30）

11月18日 テスト入団で2外国人獲得

大連は18日、テスト生として秋季キャンプに参加中のケビン・グレスコ投手（23）とレニー・ウィッティア外野手（21）の両選手を獲得したと発表した。グレスコ投手は右投右打180cm87kgで重いストレートが武器、ウィッティア外野手は左投左打189cm76kgで身体能力の高さが魅力。いずれもプロ経験がなく、育成枠として入団する模様。

11月23日 張尊、クリーニング手術を受ける

大連の張尊投手（37）が内視鏡による右ひじのクリーニング手術を行うと23日に発表された。今季10勝を上げてチームの東洋一に貢献した張投手だが5年前に手術したひじの状態は万全といえず、特に今シーズン終盤は痛みをこまかしながら投げていたという。張投手は「色々考えたが万全の状態で行きたいので手術を決断した」と球団を通してコメント。来季の開幕は微妙となるが、連覇を見据えた上でより状態を高めてチームに合流する構えだ。

11月25日 秋季キャンプ打ち上げ

25日、沖縄で行われていた大連の秋季キャンプは全日程を終了した。今日の練習メニューはランニングやストレッチ中心の比較的小さいもの。午前中に全ての日程を終えると、星渡外野手が音頭をとっての三本締めでキャンプを終了した。劉監督は「投手では譚秋雲、王貞成あたりが来季は先発陣に割って入りそう。野手では太刀川や李健太郎がいい打球を飛ばしていた。うちはまだ構成が固まったチームじゃない。こういう場所でどんどんアピールすればチャンスが巡ってくるのだから、選手たちは大事にしてほしいね」と総括した。

11月26日 英気養う温泉キャンプ終了

26日、大連恒例の温泉キャンプが終了し、参加した選手たちは

飛行機で大連に戻った。温泉キャンプとは、その年に活躍した選手たちが瀬戸内海に浮かぶ小島の小中島温泉で今季の疲れを癒して、来季への英気を養う事を目的としている。主に投手が参加するが、野手が加わる事もある。

メンバーは吉野大吾、瑞穂智幸、趙雅憲、黄直哉、野藤秀親、小松原泰誠、比山仁の各投手に清水尚起、金重男の両捕手、そして林葉輔外野手の計10名。18日から約1週間、温泉を利用したりハビリメニユーやゴルフなどの軽い運動で心地よい汗を流した。

11月29日 背番号変更 棚橋29から10へ

大連は29日、来季から棚橋和隆内野手（24）らの背番号を変更すると発表した。今季ショートのレギュラーを掴み打率・292本塁打16打点79とブレイクした棚橋内野手は29から10に変更。棚橋内野手は「29に愛着はあったが背番号が小さくなったという事はそれだけ評価してもらったという事。これからは背番号10は棚橋と定着するように頑張りたい」とコメントした。また、今季途中に加わって一軍に定着したヴィクトル・エ・ドラグノフ内野手（25）は37から5に、河剛紀外野手（24）は10から30に変更した。

11月30日 国際トレードでアーウィン投手獲得

大連は30日、すでに今季限りでの退団が決まっていたカルロス・アンジェロ外野手（28）とウイスコンシンに所属するダニエル・

アーウィン投手（27）との国際交換トレードが成立したと発表した。アーウィン投手は身長188cm体重89kg右投右打で、常時150キロを超えるストリートが武器。今季は主にリリーフとして33試合に登板、3勝1敗で防御率は3.86だった。球団ではセットアッパーとして期待している。

同日、アンジェロ外野手が記者会見を開き「来季の所属が決まっ
てほっとしている。今年はアメリカとは違う野球文化を学ぶ事が出
来てとても有意義だった。またいつか大連に帰って来たい」とコメ
ント。抜群のパンチ力と練習熱心さでチームに新風を巻き起こした
助っ人は大連の歴史にその名を刻み、去っていった。

また、今季限りで大連を退団した原克馬投手（31）を吉林が、
李衛孝投手（28）をチチハルが、鈴木常惟捕手（29）を京城が
それぞれ獲得するとこの日までに発表された。

大連オフニュース12月（適宜更新）

12月2日 主力選手交換 近堂・北と呉清元・草原がトレード

大連の近堂貴久内野手（29）北甲大投手（32）と台南の呉清元外野手（33）草原輝喜投手（24）の交換トレードが成立したと2日、両球団から発表された。二遊間と中継ぎの強化を目指していた台南と安定した長打力のある野手を求めていた大連の利害が一致した。

近堂内野手は大洋大から大連に入団して1年目からセカンドの定位置を確保。高い打撃力でも知られ、今季は規定打席に届かなかったものの打率・276本塁打8打点37の成績を上げ、チームの東洋一に貢献した。北投手はバランスのいいリリーフで、今季は10試合に登板して防御率3.18で勝敗はなし。大日本シリーズでも登板した。

交換相手の呉清元外野手は台南第三高から地元である台南に入団。パンチ力のある打撃と勝負強さで知られ、今季は打率・248本塁打19打点74だった。大連ではアンジェロが抜けたレフトの後釜として起用する方針。草原投手は左腕から繰り出される伸びやかなストレートが武器。今季は2試合登板で2敗と結果を残せなかったが潜在能力は確か。大連では先発候補として期待している。

同日、大連の球団事務所で行われた記者会見において近堂内野手は「大連で今季東洋一になったのは野球人生としてはいい区切りだと思う。自分の売りである打撃と守備で台南でも力になりたい」とコメント。北投手は「大連は本当に素晴らしいチームでしたが、自分にとっては新たなチャンスなので今はワクワクしている。台南で

は自分が投げる事で勝利に貢献したい」と語った。

12月4日 白・染が武者修行へ 山田は復帰

4日、大連の白巖承投手（20）と染恒規外野手（19）が、来季から遼東リーグに所属する営口メカニカルローズに移籍すると発表された。営口球団は大連と親密な関係で結ばれており、大上徳博内野手（24）などもかつて在籍していた。同時に今季営口でプレーした山田秀雄内野手（20）が大連に復帰すると発表された。

12月5日 高遼二が光州へ移籍

大連は5日、高遼二外野手（27）が光州へ移籍すると発表した。高外野手は今季23試合出場で打率・174に終わったが、高い守備力に定評がある。外野手の高齢化が顕著な光州が高外野手を求め、大連が了承した形。高外野手は「昨日初めて聞いた話だったので少し驚いたが、新たな挑戦にはいい機会だと思う。光州には小金井大智さんや朴芳一さんなど実力のある外野手が多いので、多くの事を学びたい。」とコメントした。

12月6日 戦力外の3選手獲得

大連は6日、前広島の前島聡史投手（32）、元名古屋の樋渡和泉投手（22）、前釜山の姜順国内野手（26）の3選手を獲得し

たと発表した。早島投手は球威のあるストレートとスライダー、パームなど多彩な変化球が武器の中継ぎタイプ。樋渡投手は怪我の影響で昨年退団し、今年は無所属でリハビリとトレーニングを続けてカムバックした右腕で身体能力が高い好素材。姜内野手は怪我が多いものの俊足が武器の実力派。

バトルシップスについて

結成は西暦1983年。親会社は瀬戸内海に本拠地を置く造船会社から成長し、今では兵器からレジャー施設まで手がける巨大企業となった幸波グループ。グループとはいわば新興の財閥である。グループの創始者であり、チームの初代オーナーである村上好寿氏はすでにオーナーを退いて隠居生活を送っているが、現在85歳で未だに健在である。

グループのルーツである幸波造船の創立は1949年。すでに日米戦争は回避され、アジアの共産化を食い止めるべく日米の関係改善が図られていた時期である。日中戦争が明確な決着がつかないまま終戦となったのは1945年。しかし40年代の終わりや50年代は内戦を制した中国共産党が満洲に幾度となく侵攻して来た時代でもある。そのたびに満洲軍や日本軍が迎え撃った。この一連の戦いが造船業にとっては特需となり、幸波造船もその波に乗って急成長を遂げた。

60年代に入ると中国と満洲との間の衝突が少なくなった。平和になった満洲では高度経済成長が始まった。それまでの間に瀬戸内海のみならず大連を中心とする満洲にもコネクションを得た幸波造船は軍事中心から貿易に用いる商船も盛んに建造するようになった。また、この頃から経営の多角化にも着手し、これに成功させる。この時点で幸波グループは野球チームを持つてはいなかったが、村上はこの頃からプロスポーツに興味を示していたようだ。

球界に激震が走ったのは1972年の事である。その数年前から台北、台南にプロ野球チームを発足させようという動きが本格化していた。しかし台湾はいわゆる外地に存在する。参加させるのは時

期尚早であるという意見とすでに期は熟したという意見を持つ球団とで対立し、アメリカに倣ったの発展的解消と称して2リーグに分裂した。この際、球団が急激に増えるとレベルの低下やモラルの混乱が懸念されるとして「今後10年間は新規球団を加入させない」という取り決めがなされたというが、その10年が過ぎる前から朝鮮半島や満洲にも球団を設立させようという動きは盛んになっていた。

1975年、村上は中央リーグの代表である三ツ木謙蔵から「新球団設立についての相談」を受けたという。村上は大連を本拠地に置く社会人球団のいくつかを吸収してその時に備えた。そして1982年の暮れ、平壤・光州・大連・新京を本拠地とする4球団が中央リーグに加入すると発表された。1983年1月9日に大連バートルシップスの結団式が行われ、その年からペナントレースに参加した。これ以降は大陸における新球団が次々と誕生して今や全28球団という大所帯となったのだが、その先鞭をつけたのが大連であったと言えるだろう。

準備期間の長さが功を奏して初期は何度もカンファレンス優勝を果たしたが、大陸と日本列島のレベル差が大きかったため大日本シリーズを制する事はなかった。チームが増加していくにつれ、カンファレンス内においても中堅クラスまで落ち着いていった。前回の優勝は1999年であった。ここ数年は選手育成に力を入れており、現監督である劉瑞生は就任2年目にして通算6回目の優勝、そして東洋最強のチームにまで登りつめた。本拠地は大連スタジアム。開場は2006年、両翼101m中堅124mで内外野総天然芝のボールパークである。

ユニフォームはチームカラーである紫、水色、金色が用いられている。ホーム用はアンダーシャツ、ストッキングが紫。襟元、肩、

袖口に水色のラインがかかっている。胸のロゴマークは金色に縁取られた紫の字でチームの名称であるBATTLESHIPと書かれている。SHIPの両端となるSの字が他より大きく書かれ、HIPは2つのSの間に少し小さく書かれている。HIPの上、両端のS字の間にHIPより小さい文字でBATTLEと書かれている。文字の下半分には水色の細いラインが3本添えられている。帽子は地の色が紫で、水色で大連の頭文字を意味するDと書かれている。背番号はロゴと同じ色合いで、胸のロゴの左下にも書かれている。

ビジター用は、上半身全体が水色で、左胸の部分に大連バトルシップスを略したDBSという3つのアルファベットをひとつにまとめたような記号が書かれている。アンダーシャツやストッキングは紫。帽子はひさしのみ紫で水色がベースの色となっている。ホームとは逆に紫でDと書かれている。そしてサイドユニフォームも存在する。これは1リーグ時代を思わせる白を基調とするシンプルなデザインで、帽子も白色に紫のひさしという色合い。胸の文字は紫単色でDALIANと書かれている。袖口や首回りから前立てに紫のラインが入っている。また、サイドユニフォームには背中に選手名が書かれていない。

球団旗は白地に上下に紫のライン、中央に野球ボールをかたどったエンブレムが描かれている。ボールにはビジターユニフォームのものと同じDBSをまとめたマークが描かれている。ボールには水色の外周があり、そこには金色の文字で「DALIAN BATTLESHIP since 1983」と書かれている。マスコットはスナメリをモチーフにしたバルシスくん。背番号は864番。また、ファンの少年少女から毎年「クルーボーイ」「クルーガール」が選出され、応援に駆けつけてくれる。チアやホームランガールといったものではなく純然たるマスコットキャラクターである。

リアルレポート トライアウト

もはや小説とは一切関係ないお話をします。内容は昨日の事です。2011年11月24日の朝、私は大阪のカプセルホテルから神戸に向かいました。早起きが苦手だし電車の乗り継ぎはもつと苦手なので、金をかけて余裕を買う事にしました。そしてその目的とは、グリーンスタジアム神戸と言ったほうが通りが良いと思われる球場にて行われる12球団合同トライアウトを見物する事です。

梅田駅や三宮駅では通勤途中のスーツが黒い列を作っていました。が、神戸市営地下鉄にはそういったタイプの人物はそれほど多くありませんでした。地下鉄が地上に顔を出して総合運動公園駅に。大体20分といったところでしょうか。この駅で同じ車両からごつそりと人が抜けました。自分含めて、暇な人間は案外多いものです。駅から球場まではまさに目と鼻の先といった所でした。

時は午前9時をほんの少し過ぎたぐらいで、まだ開門していませんでしたがすでに列が出来ていました。見回すと、横浜のキャップを被った老人、トラッキーのレジャーシートなどが目に付きました。周辺の列構成員のお話を聞くと、横浜から夜行バスで神戸まできた女性などもいたようです。なんという熱意。確か2年前、甲子園でトライアウトがあったときに行きたかったけど雨だからやっぱやめたとか言い出すどこぞのヘタレとは根性からして違います。

球場の寒さについて、この時点では風もそこまでではなく、日が出たら暖かさを感じるほどでした。確かに耳や指先といった細かい部分では多少冷たさがしましたが、まだ余裕でした。9時40分ぐらいに開門。9時開門とかいうデマ情報に踊らされて無駄に早く来たのが幸いして前から2列目の席を確保できました。その前、つ

まり最前列には古木克明選手のファンが陣取っていました。なお、ファンの席は三塁側内野席。マスコミや球団関係者はバックネット裏でした。やや髪が薄くてサングラスをかけている異常にガタイのいいスーツ姿の男、坊ちゃん刈りみたいな髪型の中年男性。これは監督たちでしょうか。それとサングラスをかけた白人の男もいました。彼の正体は不明です。

グラウンドでは外野の芝生で選手たちが軽くダッシュしたりストレッチしたりと、各々アップをしていました。遠目から見るとよく目立ったのは広島の大鮮烈な赤でした。それ以外はくすんだ赤が楽天で、オレンジが入っているのが巨人で、といった程度の理解は出来ました。がやはりちよつと遠い。オペラグラスは、買ったほうが良かったのかも知れませんが。近くにいた阪神ファンの集団は「あれがシモさん」「あれがお杉」など、オペラグラスを握って的確に選手を見極めていました。田中慎太郎選手のような育成枠や中谷選手、大城選手といったOBも知悉しており、観戦経験の豊富さを感じられました。

10時を過ぎ、選手たちが外野の一角、レフト側に集められました。トライアウトの説明を受けているのでしょうか。それが終わると選手たちは一旦ベンチに消えていきました。下柳選手が、G・G・佐藤選手が目の前を通過していくのを至近距離で眺めました。しばらくするとまた出てきて、キャッチボールを開始しました。中には下手投げでキャッチボールをしている選手もいました。今思うとあれはサブマリン投法で知られる塚本投手だったのでしょうか。

次にシートノック。ノックを打つのはオリックスの塩崎コーチでした。これもまああえて何かを言う場面ではありません。守備にミスがない、肩が強いなどと今更言っても釈迦に説法。逆にエラーしたりボテボテの返球だと目を引くほどでした。投手陣は姿を見せず。

おそらくマウンドで投球練習をしていたのでしょう。

そしてようやく本番となるシート打撃が始まったのは大体11時あたりでした。最初に登板したのが下柳投手。対戦する打者はG・佐藤選手でした。投手1人はカウント1-1の状態から打者4人と対戦します。ランナーを出したらそのまま残りますが、4人目の打者はヒットを打って一塁に生きてもすぐベンチに戻ります。投手はそれで出番終了ですが、野手は投手が尽きるまで延々とループしていきます。下柳投手の次はソフトバンクの、というよりロッテのといったほうが分かりやすそうな藤田投手。その次は日本シリーズでも登板した河原投手がマウンドに立ちました。ここらで出てくる投手は年齢順と気付きました。全体的には投手が優勢だったように思います。

投手が39人いたようで、39×4の156打席。とても長い戦いでした。その時間をさらに引き延ばしたのは観戦を辛くしたのは球場を覆う雲でした。厚いコートを着込むなどの対応はしましたが問題は足。日が当たらないと風も威力を増し、先端を襲いました。しかも最初に有名選手が連発したので、途中はちよつと実績に劣る選手が投げて正直中たるみというか、厳しい時間帯がありました。特に背番号が3桁の投手が次々と登場するくだりは。球場内の売店は閉まっており、駅の近くにあるコンビニで昼食を調達しましたが、凍えた体を揺り動かすために多少走りました。

目に付いた選手としては、加藤大輔投手は球速もそれなりに出ていたしこれはすぐにでも球団が決まるのではという感じでした。最後のほうで元中日の樋口賢投手が出てきましたがこの樋口、詳細不明の何かが起こって2年で退団という非常に不可解な去り方だったのでここに復活した事を喜ばしく思います。140キロを超えていたし素材としてはありなのでは、などと臆言発言をしてみますが獲

るのは編成担当者ですし。

続いて出てきた松田翔太投手は、投球練習の時点で観客を沸かせていました。なんと、左投手でありながらアンダースローも駆使していたのです。サブマリン専用ではなく、普段は上からでバリエーションとして横や下でも投げるといったタイプのようですが、アンダースローを披露した時には「水原勇気か」などというざわめきが起きました。そして実戦でも1球アンダースローで投げて、ストライクを取りました。この松田投手でトライアウトは終了。最終盤はネームバリューはないもののなかなか個性的な選手が出てきたのでなかなか面白い光景でした。

野手では、一番歓声が大きかったのは古木選手でした。オリックスの以前のビジター用ユニフォームに、帽子だけは紫に白い字でMという別物という不思議な格好でプレーしていましたが、意外と鋭い打球を飛ばしていました。格闘家転身など波乱万丈の人生を送る選手ですが、球界復帰となると色々面白そうです。とりあえず乱闘参加は禁止で。バッティングが上手かったのは田中慎太郎選手でした。二軍での成績も良いのですが、守備位置の問題があるようです。

一方で明らかに球威がなくて「ああ、これは厳しいな」と感じざるを得ないベテラン投手や、コントロールに不安があっていきなりストレートの四球（正確にはボール3連発）で球場を絶句させる投手などもいました。野手でもエラーを連発するとやはり厳しいし、明らかにヒット打てそうにないなという選手がやっぱり駄目だったりとすると何とも言えなくなりました。全員がプロとはいきませんが、各々にとつていい道が開かれるとそれが一番素晴らしい事でしょうし、無責任ですがそうなればいいな。

トライアウト終了後、マスコミと一緒に球場出口に群がりました。

マスコミが多く群がったのは古木選手と中谷選手でした。「古木選手を撮れました、中谷選手も撮れてると思います」とか「後は古木選手が車に出入りする場面を撮って」などと電話で連絡を取っていました。個人的に印象に残ったのは子供2人「サインください」「選手「何言ってんだ（笑）」とかいうやりとりの後、すかさずその選手が「（この子供たちは自分の）教え子です」とか言ってた場面でした。この選手はどうやら田中聡選手ですね。どこか心穏やかになりました。

ルートを知った分、行きより帰りのほうがスムーズでした。しかし疲労はあるのでそこはやっぱり疲れました。帰宅したら軽くシャワーを浴びてすぐに眠りました。複数の人間ドラマが生々しく交差する場面に立ち会う経験はそうできるものではないので、見に行っちゃったと思っています。でも寒さだけは勘弁。

リアルレポート トライアウト（後書き）

ほとんど小説と関係ありません。しかしまあ、例えるなら漫画単行本の余ったページに掲載される作者の内輪話みたいなものというところで理解していただければ幸いです。口調も本分の断定口調ではなく丁寧口調で別物感を出してみました。あくまでもややま話だからこんなのも書けるのです。

V戦士インタビュー 星渡晃兵

今季大日本リーグ28球団の頂点に立った大連バトルシップス。その大いなる覇権に貢献した選手たちの様々なドラマをインタビューを通じて迫る。今日は不動のトップバッターとして活躍した大連の若きスピードスター星渡晃兵外野手に話を聞いてみた。

インタビュー（以下イ）「東洋一おめでとうございます。」

星渡晃兵（以下星）「ありがとうございます。目標としてきたので本当に嬉しいというか、やったぞという感じですね。」

イ「まず、今季を振り返ってみて、星渡選手にとって今季はどのようなシーズンだったでしょうか。」

星「とても充実したシーズンでした。チームが優勝を争う中で自分もチーム全体もどんどん良くなっていくのを感じたし、それで結果も出たので。その点はすごく満足しています。」

イ「個人成績については？」

星「今季は統一球なのでホームランという点ではやはり減りましたね。それは来年以降の課題ですけど、それ以外の、特に打率に関しては3割を目標にしてきたので。それに盗塁もとりあえず40つてのはあったので、達成できて良かったなと思います。」

イ「今季はプレーがより積極的になったように感じました。」

星「ええ、それは自分でもかなり意識しました。もう24になりますからね。そろそろ期待じゃなくてしっかりした実績を残さないといけない時期。今のままに固執してはいけないと思って。」

イ「その結果が今季の成績につながったわけですね。」

星「いやあ、まだまだですよ。来年はタイトルも取りたいし、そのためにはもつと鍛えないといけない。現状に浮かれたらあつという間に取り残されるのがこの世界ですからね。」

イ「さて、お話は変わりますが、星渡選手が野球を始めたきっかけは何でしょうか。」

星「父はラグビー、母は陸上、兄はサッカーというスポーツ一家なんです。父は何でもいいから熱中するものを見つけるようにとよく言っていました。で、僕が小3の時に野球やりたいって言うときすぐグローブを買いに行った。兄はサッカーで周りの友達も静岡だし結構サッカー派が多かったんですけど、自分は自分だしってのもあって。松枝東ファイターズってチームでした。」

イ「小学時代のポジションは？」

星「結構色々やりましたね。レギュラーになったのは4年で、その頃はライト。5年でセンターやレフト、それにピッチャーもしましたね。6年はピッチャーメインだった。でもそんなに強いチームじゃなかったし、遊びの延長みたいなものでした。」

イ「打撃については？」

星「内野安打が多かったですね。足は速かったし左（打席）なので小学生の頃は全然パワーなくて、やせてたから長打はほとんどなし。ワイヤーみたいな手足ですよ。変わったのは中学時代からですね。」

イ「中学時代はどう変わったのですか？」

星「成長によってパワーがついてきたのもありますが、一番大きかったのは2年の時に県大会で勝ち進んだ事ですね。これでやれるじゃんって思った（笑）。それとこの活躍が雑誌に載ったんですよ。バネが凄いとかが将来有望とか書かれて、はつきり言って調子に乘りました（笑）。見られてると意識されるともつといいところ見せようとなるし、そのためにはどうすべきかってのもだんだん見えてきたような気がする。とにかく、自分は注目されたほうが燃えるタイプなので。」

中学時代にそのたぐいまれな身体能力を見込まれ、各地から注目を浴びるようになった。中には東京の高校からのスカウトもあったという。その中で星渡は、地元と言える富士見ヶ原高校に進学した。

イ「中学時代に静岡中の評判となり、東京の高校からもスカウトされたそうですが、富士見ヶ原高校に決めた理由は何でしょうか。」
星「まあ兄と同じだとか家から近いってのもあったんですけどね（笑）、最後の決め手となったのは鈴木守弘監督です。兄からも話は聞きましたが『いい監督さんだぞ』って（笑）。」
イ「入ってみてどうでしたか？」

星「厳しかったですよ、それはもう。毎日帰宅すらままならないほど疲れました。鈴木監督は『お前をプロにするのが俺の仕事だ』っていつも言っていましたから。監督のお陰で自分も『絶対高校からプロになってやる』と思うようになりました。」

イ「プロのスカウトから注目されるようになったのはいつ頃でしょうか。」

星「2年生の夏の大会ですね。県予選でピッチャーとして決勝戦まで行きました。背番号は10でしたが、凄い素材がいるみたいに言われて。ただピッチングよりも俊足とかバッティングフォームに癖がないみたいな事をよく雑誌に書かれてましたよ。投手としての評価はほとんどなかった。」

イ「投手としてはどのようなタイプだったのでしょうか。」

星「投手としての技術は全然なかったですね。それこそ身体能力だけで、それでも143キロ出るのは凄い、みたいな感じで。ただ自分でもピッチャーとしてはそこまででもないというか、プロとなると厳しいかなとは自覚していました。もう投手に未練はありません。」

一度も全国大会に出場できなかったため一般的な知名度は低かったが、大連のスカウトは外野手の最有力候補として追跡を続けてきた。そして第2次ドラフト会議の1人目、全体で言うところには次ぐドラフト2位で指名した。

イ「ドラフトでは大連の2位指名でしたが。」

星「正直2位は驚きました。中位指名だと聞いていましたから。聞いたのは授業中でしたが大連の2位指名って先生から聞いたとき『嘘でしょ』って言うちゃいましたから（笑）。」

イ「大連の印象はどうでしたか。」

星「日本列島以外に言ったことはなかったのですが多少は不安でしたけど、プロになれるのだから場所がどうみtainなこだわりはなかったですね。」

星渡2位指名はファンやマスコミにとってまったく寝耳に水の指名であった。本人の実力よりサッカー選手星渡利一の弟であるといった報道が目立った。しかし間もなく「星渡利一の弟」ではなく「星渡晃兵」としてファンの耳目を集めるようになる。プロ1年目から二軍のセンターに定着。打率は.238と1年目にしてはなかなかの数字を残した。また、チーム最多の26盗塁を決めるなど早くも高い身体能力を見せた。

イ「プロ1年目の印象はどのようなものでしたか？」

星「まず二軍キャンプの初日から全然違いました。とにかくみんな大きい。それで速い。僕は今でも小さいほうだし新人の頃はもつとでしたから、どうしよう、居場所なんてあるんだろうという怖さがありました。」

イ「しかしシーズンでは二軍のセンターに定着しました。」

星「監督が使ってくれたのが大きかったですね。でも自分としてはもつとこうやりたいのに未熟だから全然できなくて。野球をやって一番きつかったかも知れません。」

イ「それは具体的にどういうことでしょうか。」

星「それまではただ身体能力だけで野球をやっていたんだと思い知らされましたね。林（葉輔）さんが怪我から復帰して二軍で調整す

るのを見ましたが、力を入れている風でもないのに打球が凄い勢いで飛んでいく。それに比べて自分は力任せで不恰好なフォームで恥ずかしかったですね。フォームに関しては未だに満足していません。林さんは流れるように美しいフォームだけど僕のはもう全然ぎこちなくて。野球技術を貪欲に追求するようになったのは1年目がようやく終わりにかけてからです。」

イ「じゃあ1年目の成績については。」

星「ええ、全然満足していませんでした。それに野球選手は一軍でやってなんぼですから。でも自分はそれに値しないと分かっていて成長するしかないのになかなか進めなくて、怪我しなかったのは幸いでしたよ。」

2年目、当時大連の監督を務めていた潔原勇仁（52）によって春季キャンプ一軍スタート組に抜擢される。俊足を買われてのことだった。この頃、大連は盗塁王を獲得した経験のある三浦修吾（39 現在解説者）の足が衰えを見せており、新たなトップバッターが求められていた。

イ「そして2年目には一軍で起用されるようになりました。」

星「足の速さは確かに上のほうだったので、まずそれを切り口に一軍出場できれば、ぐらいの考えでした。打撃に関しては全然でしたし未熟なのは自覚していましたから。でも紅白戦やオープン戦で偶然ヒットが出て開幕まで残った。」

イ「初出場はいつでしたか？」

星「それが開幕戦だったんですよ。相手は新京で、7回に李安重さん（現台北二軍打撃コーチ）の代走で。今は安東にいる野瀬（久幸）さんがピッチャーでした。」

イ「結果はどうでしたか。」

星「その時は特に何もなくて。でも凄く緊張しましたよ。牽制も凄い勢いで迫ってきて、ビデオで見ると帰塁が明らかに変な動きで（

笑)。初打席は次の試合でピッチャーは久慈（一正）さん。何も出来ずに三振でしたね。監督にとにかく振って来いと言われたので、それは実行しましたけど（笑）。」

イ「結局この年は67試合に出場して打率・220でした。」

星「ほとんど代走とか守備固めだった気がします。試合感覚を身につけるために二軍の出場も多かったので忙しい年でした。でもこの年は色々学べました。一軍のスピード、それについていくにはどうすればいいか。ウェイトトレーニングを始めたのがこの年のオフからですね。」

3年目は星渡にとって飛躍の年となった。レギュラーとして123試合に出場、打率・274本塁打3盗塁21とブレイクを果たした。また、この年限りで三浦が京都に移籍して2年後に引退。それ以降、大連の1番センターは星渡で固定される。

イ「3年目からレギュラーに固定されました。」

星「この年のキャンプで三浦さんが怪我したので潔原監督はオープン戦で多く使ってくれました。これはチャンスだという事で今まで以上に積極的にアピールしましたね。打撃も守備も一歩が大事というか、とにかくミスをして前へ前へと意識しました。確か打率は3割超えて開幕戦スタメンまで行きました。」

イ「その開幕戦で今や伝説となっているファインプレーが生まれました。」

星「バッターはハルビンのマテオ・ソサ（32 現マイナーリーグ）で、長打に警戒して下がっておけという指示は出ていました。打球は左中間へのかなり強いライナーで、走っても届くかちょっと不安でしたが、それを振り払うように走って無我夢中でジャンプしたら取ってて。もうこの時点で頭は空っぽ、全部吹っ飛んでました。でも内野を見るとランナーが結構離れていたもので、とにかく届けと二塁に投げると意外といい球で（笑）、とにかくすべてにおいてうま

くいきすぎでした。」

イ「これで潔原監督は星渡選手を使い続けようと決心したそうです。」

星「そういう意味では本当に大きかったですね。自分としてもこういう無我夢中に頑張っていくしかないかと改めて思いました。それで1年、途中息切れもしましたが一応持ったというのは自信にもなりました。」

イ「そしてその翌年となる一昨年は3割到達、劉監督に代わった昨年は20本塁打と打撃も開眼しました。」

星「自分としては去年の20本より一昨年の3割のほうが嬉しかったです。1番打者ですから、もちろんホームランも必要ですが塁に出てなんぼですから。そういう意味では四球が少ないのはもったどうかしないと、とか思っています。」

イ「星渡選手の理想とする選手像は？」

星「とにかくファンからの信頼が大事ですね。星渡なら大丈夫だろうと思われます。そしてそれを長く続けたい。大連といえば星渡のいるチームと思われるぐらいに。林さんはそこまで行っていますが自分は全然。目標は林さんですね。」

イ「最後に、来季に向けて一言お願いします。」

星「今季はチームとしても個人としても納得できる成績を上げられましたが、まだこれが完璧ではないと思っています。目標としてはまず打率3割、その上でホームランも狙っていききたいし盗塁もガンガン仕掛けていきたい。そうした積み重ねによってチームの目標である連覇も見えてくるはずです。ファンの皆さんの応援は本当に力になりました。来季も変わらぬ声援をよろしくお願いします。」

緊急インタビュー 新加入の呉& a m p ;草原

トレードでの加入が決まった呉清元外野手と草原輝喜投手。来季からの頼もしい戦力となりそうなのこの2選手にQ& a m p ; A方式による簡単なインタビューを試みた。質問は9つ。

Q1 トレードが発表されてから3日、今の気持ちを聞かせてください。

呉清元（以下呉） 僕は生まれてからずっと台湾にいたので今回の移籍で初めて台湾以外の場所に本拠地を持つ事になります。最初に（トレード話を）聞いた時は不安もありましたが、今は新たな挑戦を楽しみにしています。

草原輝喜（以下草） もう契約は済んでいたのので来季も台南でやるつもりでした。しかし大連というチームに必要とされたのは光栄ですし、期待に応えなければと思っています。

Q2 トレードはいつ知りましたか。

呉 会見の前日でしたね。安兵久球団代表に呼び出されて聞かされました。断腸の思いだった事や大連のほうから求めたトレードだったといった話でした。最後までずっと台南でと考えていたので少し悩みましたが、最後は新たなチャレンジと思い直して（トレードの話）受けました。

草 僕も前日でした。練習場で自主練習をしている途中に呼び出されて聞かされました。今季の成績は良くなかったので来季こそはと思っていました。これも自分のためと思いすぐに切り替えました。

Q3 背番号は呉選手が3番、草原投手が45番に決まりました。

呉 3番は打撃のいい選手が着ける番号。球団からも期待されているという事なので身の引き締まる思いです。台南時代の背番号9に

も愛着はありましたが大連には僕なんかよりふさわしい選手が着けていますから（大連の背番号9は林葉輔外野手）。新たなチャレンジに新たな背番号のほうがいいでしょうし。

草 背番号にはそれほどこだわりはありませんが、大連の45番といえは草原投手と思われるぐらいの活躍をするぐらいになりたいですね。

Q4 大連という球団についての印象は。

呉 若い選手が多く、28球団の中でもかなり元気がよくてグングン伸びているという印象があります。僕は33とベテランと言っている年齢ですが、今までと異なる環境で僕自身もいい刺激を受けながら若い選手にも色々教えられれば。

草 投手陣は若くて力のある選手ばかりだし、一番勢いがあるチームだと思っていました。実際のところはまだ分かりませんが、いいチームだと思います。

Q5 大連で特に気になる選手はいますか。

呉 そうですね。やはり星渡（晃兵）君でしょう。彼は何でもできる選手でその才能がうらやましい。守備や走塁は自分が教えてほしいくらいだけど（笑）打撃に関しては色々話し合えそう。それに林（葉輔）さん。本当に打撃技術が素晴らしい。特に変化球の打ち方は常々参考に使っていたので。

草 張尊投手ですね。投球術を見習いたいです。

Q6 自分のセールスポイントを教えてください。

呉 打撃ですね。特に長打とランナーがいる場面での勝負強さには常にこだわってきたので、そういうところを見てもらいたいですね。草 左腕という点、それとストリートには自信を持っています。

Q7 呉選手から見て草原投手は、草原投手から見て呉選手はどの

ような人物ですか。

呉 寡黙ですが常に真面目で練習熱心ですね。特に野球に対しての情熱はかなりのもの。でも時々考えすぎるところがあるので、それもいいけど気分転換もうまくやるのも技術の一つだからね。でもきつと将来は大物になりますよ。

草 見た目は怖いですけど（パーマのかかった長髪と口ひげがトレードマーク）、僕みたいな若手選手が一軍に上がったときは気さくに声をかけてくれますし、野球に対してもここぞという場面での集中力が凄いので見習いたいです。

Q 8 来季への意気込みをお願いします。

呉 東洋一に輝いたチームに必要とされたという事で、つまりは自分の打撃力を買われたものだと思っています。まずは打撃についてはファンや球団の期待を裏切らないようにしたいですね。とりあえず数字としては2割8分、20本塁打、そして打点は80を目標にやっていきたいですね。

草 大連にはいい投手が多いですが、キャンプからしっかりアピールして先発に食い込んでいきたいです。具体的な数字はまだわかりませんが、とにかくどんな役割であれ1年間投げきることでチームに貢献できれば。

Q 9 最後に、ファンに向けて一言お願いします。

呉 今一番勢いのあるチームで来季からプレーできる事を光栄に思っています。まずはしっかり数字を残す事でファンの皆さんに認めてもらいたいと思っています。来年からは大連の呉清元をよろしく願います。

草 まずはグラウンドで僕のピッチングを見せられるように頑張りたいと思っています。見ていてください。

V戦士インタビュー 比山仁

延長戦がなくなった今季、大連の9回を守り抜いたのが比山仁であった。潜在能力は認められながらもこれまで発揮できずにいた彼だが、ついに覚醒してチームの東洋一に大きく貢献した。活躍の秘訣は何だったのか。

インタビュアー（以下イ）「東洋一おめでとうございます。今季は大活躍でしたね。」

比山仁（以下比）「ありがとうございます。」

イ「まず、今季抑えの切り札としてチームになくはない存在となりましたが、今年を振り返ってどうでしたか。」

比「その時その時は辛かったり苦しかったりはあつたはずですけど、今となつてはあつという間に過ぎ去つた感じですね。」

イ「それだけ充実していたという事でしょうか。」

比「そうですね。今季は結果が出たのが良かったですね。監督からは『9回は何があつてもお前だ』と言われて、それで今まで以上に燃えたというか、力を引き出してもらいました。」

イ「確かに、抑えとしてセーブを積み重ねることにピッチングが良くなっているように見えました。」

比「やはりバッテリーを抑えると楽しいですし、セーブがつくのもそう。ピンチでも今までは『ここで打たれたらどうしよう』でしたが『何としても抑えてやる』と強気に考えられるようになりました。」

イ「最終的には36セーブを積み重ねたわけですが、この数字についてはどう思いますか。」

比「まあ満足しています。ただ今年は割とずっといい調子だったのでもこの数字を残せたという部分もあるはずです。来季以降もこの36セーブを目標にしたいですが、それには悪いなりに抑えられるようになっていないといけない。まだまだ伸ばせる場所は多いと思います。」

「比山は熊本県出身。野球が盛んなことで知られる土地でおおらかに育った。子供の頃は運動神経がよくスポーツなら何でも得意な明るく活発な子供だったという。」

「比山選手の球歴について伺います。比山選手が野球を始めたのはいつ頃でしょうか。」

比「確か10歳の頃です。最初はサッカーをしていたんですけど、練習するグラウンドが隣の小学校で遠かったので、自分の小学校にある野球部に入ったのが小4でした。」

伊「ポジションはどこでしたか。」

比「1年目は控えで、5年生で外野手になって、6年生で内野手でショートがメインになりました。」

伊「ピッチャーはやらなかったのですか。」

比「小学生の頃は身長が低かったので。あ、でも少しは投げたかもまあメインは内野で、ピッチャーはほとんど記憶がありません。中学に入ると身長が伸びてきたのでピッチャーがメインになりました。3年で30cmは伸びましたね。」

伊「中学時代はどのようなピッチャーでしたか。」

比「それまで投手したことがなかったので変化球は投げられませんでした結構抑えられましたね。」

伊「それはやはり比山投手の天性の野球勘ということでしょうか。」

比「そう言われると凄いいですね（笑）。でもまあそういうことだったのかも知れません。中学校で野球部の顧問だった月田先生がOBという事で熊本南高校に進学しました。」

熊本南高校は熊本県でも屈指の野球名門高校として知られている。この恵まれた環境で本格的な指導を受けた比山はおおいに成長し、九州でも屈指の本格派投手としてプロのスカウトたちからの熱い視

線を集める事になる。

イ「高校時代はどのように過ごしていましたか。」

比「ずっと野球野球でした。同級生には大阪から野球をするためだけに来たという部員もいましたし、僕は地元出身だけどそういう別のところから来た部員には負けられないようにとずっと思ってた。頑張りました。基本的にのんきな性格でしたが、とにかく高校時代はずっと燃えていたような記憶があります。」

イ「そして187cmの長身から繰り出す最速148キロのストレートが武器の大型右腕として注目されるようになりました。」

比「プロのスカウトがグラウンドに来たことはありませんでした。しかし正直に言いますと高校の段階でプロはまだ早いと思っていました。技術が全然足りていませんでしたから。まず変化球がほとんどないそれにコントロールも酷いものだったし、プロに入っても通用するレベルには遠かった。」

イ「それで大学進学を決意したのですね。」

比「ええ。色々な大学から声がかかりましたが関西体育大学に決めたのは、OBの宇多利通さん（37 現安東）にあこがれたからでした。当時は福岡のEースで何度か試合を見に行きましたが、僕が見た試合はいつも完封か1失点ぐらいのピッチングで『これがEースなんだ』と思いました。常に結果を残すのがEースなんだろうと考えていますから、理想はあの宇多さんです。」

イ「大学では1年生の時に怪我をしたもののその後復帰し、3年春のシーズンにはリーグ最優秀選手に選出されるなどまた一段と大きく成長しました。」

比「怪我したときは焦りました。でも大島準監督が『まだ3年あるから絶対に焦るな』と言ってくれて。とにかく怪我してから体幹を鍛えました。この時にしっかりと体の基礎を固めたお陰で今年も持ったんだと思います。公式戦初登板は2年の秋でしたが、今までより軽く投げたはずが威力は増していて効果を実感しました。それ

に変化球もこの頃によくものにしました。今投げているフォー
クも大島監督から教わったものですし。」

イ「そしてドラフトでは大連の3位指名でした。」

比「僕の場合4年生の時に少し肘を痛めたのでアピールする期間が
短かった。でもとにかく指名されればいいと考えていましたから。
どこじゃないととか順位のこだわりはありませんでした。むしろ3
位は予想以上に高かったぐらいです。」

本格派として期待された比山だがプロでは伸び悩んだ。ブルペン
では抜群のボールを投げるのにマウンドに立つと緊張のあまり普段
の実力を発揮できず炎上を繰り返して3年が過ぎた。しかし劉監督
はそんな比山に抑えの重責を担わせた。

イ「プロに入ってからはどうでしたか。」

比「1年目の春季キャンプでは一軍スタートでしたがまったくつ
いていけませんでした。テレビで見た選手たちが今日の前にいるなん
て思っで、完全に飲まれていた。で、張り切りすぎて故障して、4
月まで復帰できませんでした。」

イ「しかし復帰後、二軍戦では防御率1点台と実力を見せ、一軍で
の登板も経験しました。」

比「一軍初登板は覚えていません。緊張だけで全てが終わった。結
果は酷かったです（1回を3失点）何を投げて誰に打たれたとか
もビデオを見て初めて知ったぐらいでしたから。」

イ「昨年までなかなか台頭できなかったのは精神的な面によるもの
が多いのでしょうか。」

比「そうですね。自分にプレッシャーをかけすぎていたというか、
完璧な結果を求めすぎていたんだと思います。四球を与えてはいけ
ないのは当然ですよ。でも出てしまう時は出るものですから。去
年までは四球を出したらその事について考えすぎてしまい、崩れる
事が多かった。」

イ「しかし今年はそういった場面もほとんどありませんでした。精神的な壁をどのように克服したのでしょうか。」

比「まずポジションが固まったのが自分にとってはやりやすかったですね。当初は先発かりリーフかわからなかった。調整の仕方が違うのでちよつと混乱した部分もあった。でも劉監督は後ろでとまず決めた。それで調整が楽になったのはあります。それと今年は自分が抑えをするにとつて楽なルールでした。」

イ「それはどういう事でしょうか。」

比「今年は延長戦がなくなったので9回は一番最後でしょう。自分が打たれたらその時点で終わり。僕の場合はそれでようやく開き直れた。内容よりもセーブという結果が大事なんだと。それに先発から小松原さんや野藤さんやみんながつかないで最後を任せるというポジションなので、責任感がありますよ。チームの勝敗は自分のピッチングにかかっているんですから。去年まで抑えの西坂（有司 31 現京城）さんがいなくなって、もう逃げ場はない、自分がやるしかない。」

イ「最後に、来季に向けて一言お願いします。」

比「今年は自分にとつてもチームにとつても最高の結果を残す事が出来ました。まずはそれを続ける事。個人の目標としては、やはりタイトルはほしいですね。岩辺（仁志 名古屋）さんや辻川（久児 大阪）さんのような長く活躍できる抑えになればと思っています。ファンの皆様には、今年も勇気付けられました。皆様の声援あつてのプロ野球選手なので、来年からも球場での声援をお願いします。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7324y/>

バトルシップスよもやま話

2011年12月6日17時53分発行